

小田原文学館特別展

没後一二〇年記念 アンビシヨンのかなたに



北村透谷

平成26年 8/21(木) ~ 9/23(火・祝)

小田原文学館



ごあいさつ

明治期に詩人・評論家として活躍し、島崎藤村や樋口一葉に影響を与えたことでも著名な北村透谷（門太郎）は、明治元（1868）年に小田原唐人町に生まれました。

明治14（1881）年には、一家で上京し、数寄屋橋近くの泰明小学校に転校し、明治16（1883）年には東京専門学校（政治科）に進学します。透谷はこの頃、のちに妻となる美那子〔美那、ミナとも表記〕の父石阪昌孝、青年活動家であった弟石阪公歴、大矢正夫などの三多摩地域の自由民権運動の活動家と出会い、この運動に共鳴します。しかし、明治18（1885）年には現実の政治活動を離れ、東京専門学校（英学科）に再入学しましたが、熱心に通学はせず、旅行をよくしていました。この時の講師は、坪内逍遙でした。

明治22（1889）年に処女作『楚囚之詩』を刊行し、以後は文学の道を歩みます。日本初の自由律長詩の作品として後世に評されました。一方、『女学雑誌』や『文学界』などの文芸雑誌に発表された評論では、近代以前の日本にはなかった「恋愛」や「文学」などの欧米の概念を提唱し、当時の知識人に衝撃を与えました。透谷の作品は、彼が実際に経験した、政治、文学、恋愛、信仰から導き出されたものでした。その人生はわずか25年の短いものでしたが、その作品は、詩、評論、小説、戯曲など多岐のジャンルにわたり、130点以上にのぼるといわれます。

没後120年を記念して開催する本展は、透谷が関わった自由民権運動、文学、恋愛をひも解き、透谷が好んだ「アンビション」（理想・夢・大志）という言葉キーワードにその人物像にせまります。

明治を駆け抜けた青年北村透谷の生きかたから、今日の私たちは、自分らしく生きること、一生懸命に悩み、考え続けることの大切さを読み取ることができるのではないのでしょうか。

本展が、透谷文学の普及に寄与し、小田原の文学により一層親しみを深める一助となることを願います。

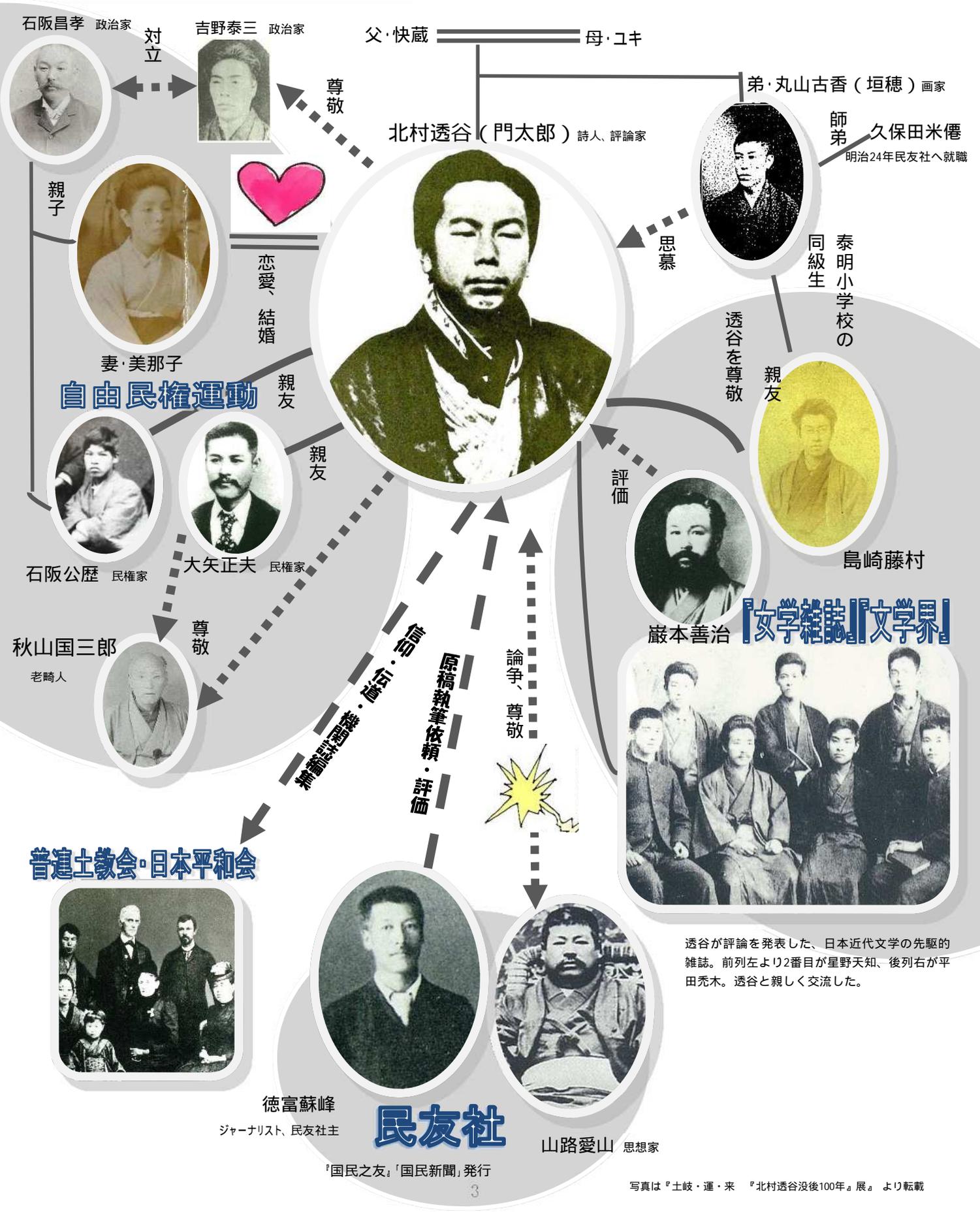
凡例

1. この小冊子は、平成26年（2014）8月21日（木）～9月23日（火・祝）を会期として小田原文学館で開催する同名展示の解説書です。
2. 本冊子の編集及び執筆は小田原市立図書館学芸員 白政晶子、鳥居紗也子が行いました。
3. 執筆にあたって、鈴木一正氏のご教示を賜りました。
4. 引用の際に新字体に改めた箇所があるとともに、ルビ、傍点、敬称等は適宜省略しました。
5. 透谷の著作の引用は、原則として勝本清一郎編『透谷全集』第1～3巻（岩波書店、1950～55年）および『明治文学全集』第29巻 北村透谷集（筑摩書房、1976年）によりました。
6. 透谷の名前の表記について、刊行物に掲載されたものは「北村透谷」で統一し、書簡で署名があるものは原文に従いました。
7. 今日の人権意識に照らして不適切と思われる表現については、原文を尊重し、そのまましました。
8. 展示内容と本冊子の掲載内容・資料番号等は異なる場合があります。
9. 会期中展示替えがあるため、本冊子中の資料が展示されていない場合があります。
10. 本展タイトルにある「アンビション」は透谷の表記に従いすべて大文字としました。



透谷人物相関図

透谷は、生涯で様々な政治家や文学者と関わりました。政治家となることを目指した明治16年頃には、自由民権運動に共鳴し、石阪昌孝、その長男公歴、秋山国三郎、大矢正夫などの関東地方の民権家と交流を持ち、相州を巡遊したり、勉強会に参加したりしました。のちに妻となる美那子は、神奈川県会議長を務めた石阪昌孝の長女でした。女学校に学び、キリスト教徒であった近代的な女性美那子との出会いは、現実の政治活動を去り、文学に転じたのちの透谷の知的源泉となったと考えられます。キリスト教に入信した透谷は、男女が対等に個性を認め、精神的なつながりを持つという近代的な「恋愛」を提唱し、島崎藤村を初めとした知識人に絶賛されました。透谷が評論活動で最も活躍したのは、浪漫主義文学の興隆に寄与した文芸雑誌『文学界』でしたが、ここで透谷は山路愛山が論じる功利主義の文学に論戦するなどしました。評論において透谷は、好んで内部の生命や精神の自由などを論じました。



透谷が評論を発表した、日本近代文学の先駆的雑誌。前列左より2番目が星野天知、後列右が平田禿木。透谷と親しく交流した。

写真は『土岐・運・来』『北村透谷没後100年』展より転載

第1章 北村家

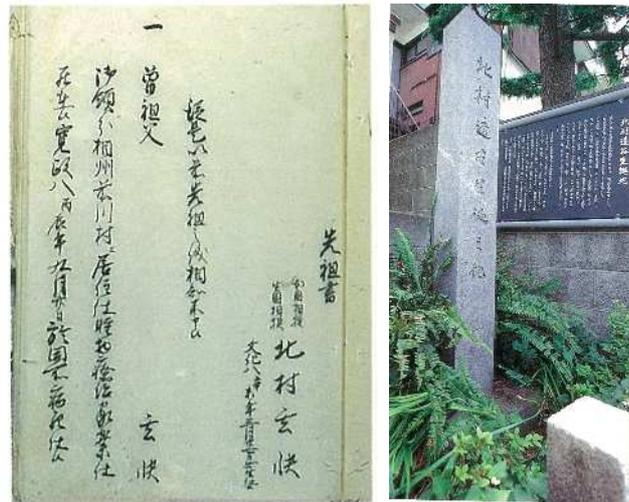
1868(明治元)年12月29日、透谷・北村門太郎は、小田原唐人町(現浜町3丁目)に小田原藩士北村玄快の長男快蔵・ユキの長男として生まれました。北村家は小田原藩に仕える家系でした。祖父玄快は、藩医として家業に励み、安定した収入を得ていましたが、明治維新以降の北村家は没落し、父快蔵は海軍省や大蔵省に出仕したものの下級官吏として過ごし、母ユキは内職をしたといいます。快蔵とユキの間には門太郎(透谷)と弟垣穂の二人の子どもがいました。内気な少年だった透谷は、厳格な祖父、祖母、豪快な父快蔵、教育熱心な母ユキ、優等生の垣穂に囲まれて育ちました。少年時代の透谷は、「楠公三代記」、「漢楚軍談」、「三国志」などの歴史小説を愛読し、小田原の海辺で「軍事をまねる」遊びをするなど、英雄豪傑たることへの「アンビション」を抱いた少年でした。

北村君は明治元年に小田原で生れた人だ。阿父おとうさんは小田原の士族であつた。まだ小さな時分に、両親は北村君を祖父母の手に託して置いて、東京に出た。北村君は、十一の年までは小田原にゐて、非常に厳格な祖父の教育の下に、成長した。祖母といふ人は、温順な人ではあつたが、実の祖母では無くて、継祖母であつた。北村君の言葉を借りて云へば、不羈磊落ふきらいらく〔自由気ままで豪快なこと〕な性質は父から受け、甚だしい神経質と、強い功名心とは母から受けた。

島崎藤村「北村透谷の短き一生」『文章世界』7巻14号、1912(大正元)年10月



参考 石井富之助「生家」スケッチ(『民衆』5号掲載写真より石井富之助がスケッチしたもの)。



1. 北村玄快「先祖書」1842(天保13)年、小田原市立図書館蔵 小田原有信会文庫

小田原藩が家臣の履歴や家系の調査のため、定期的に臣下に提出させた。資料は透谷の祖父玄快が書き上げたもの。

6. 「北村透谷生誕の地の碑」1954(昭和29)年 小田原有信会文庫

小田原市浜町に建立。揮毫は透谷の長女堀越英子による。

透谷の実弟 丸山古香(垣穂)



透谷の実弟丸山古香は、兄とは異なる分野で才能を発揮した人物だった。古香は、実家の煙草屋を継いだのち、明治20年代後半に京都画壇の久保田米僊べいせんの弟子となり、明治30~40年代頃に師の画風を引き継いだ優美な人物画で人気を博した。(米僊は明治24年に透谷とも親交があった徳富蘇峰主宰の『国民新聞』に入社するため上京し、画塾を開いた)。古香は普及や育成活動にも積極的で、明治34年には岡倉秋水、小堀鞆音ともとなどの若手の画家や彫刻家を中心に美術家団体「日月会」じつげつかいを設立した。同会は公募展の開催による美術界の啓蒙普及を行う目的で設立され、日本美術院、白馬会と並び称される規模の団体となった。明治40年代には同会の優秀作品はしばしば「御買上」となり、展覧会への侍従差遣も行われた。古香も明治41年には竹田宮、同42年には北白川宮の婚礼に際し、女官より献上画を委嘱され、揮毫している。古香と透谷の関わりは従来あまり検証されていないが、師米僊を識ったのは、おそらく透谷を介した徳富蘇峰とのつながりであったろう。また、透谷没後に星野天知等編『透谷全集』(文武堂、明治35年10月)挿絵を担当していること、また「自家の経歴の如きは多く人に語るを好まず」(川島正太郎編『現今名家書画鑑』)といった記述などからも兄への思いの深さが推し量れるのではないだろうか。



4. 丸山古香「朧月図」『美術画報』7巻12号、画報社

第2章 門太郎とアンビション

透谷は、12年間小田原の地で過ごしましたが、1881 (明治14) 年に上京し、泰明小学校に転校したのち、東京専門学校政治科に進学します。上京後は、当時活発だった自由民権運動に触発され、自らも「自由の犠牲にもならない」とするため、政治家を志すという、新たな「アンビション」を抱きました。透谷は、1884 (明治17) 年頃から、民権運動の青年政客大矢正夫や、若い民権家に慕われた老崎人秋山国三郎、後に妻となる石阪美那子の父昌孝 (三多摩の自由民権運動のリーダー)、弟公歴らと交流を持ち、勉強会や地方へ旅行へ出かけました。人間は生まれながらに平等であるという天賦人権思想を根底とする自由民権運動に参加することにより、透谷の「アンビション」は、「東洋の衰運を恢復」し、「キリストの如く」民衆のために一身を捧げるという、理想主義的な様相を呈していきます。しかし、大矢から非常手段をとまう行動への参加を求められ、苦悩の末に政治運動からの離脱を決意します。この出来事は、透谷に、現実の政治活動と彼が抱いた理想の政治との埋めようのないギャップを意識させることになりました。透谷は、この時の心情を「アンビションの梯子から落ち」と回顧し、政治活動から離れていきます。時期を同じくして執筆した「富士山遊びの記憶」(明治18年)は、政治活動に挫折した透谷が、政治小説家を目指して書いたものとされています。自由な個人同士が作り出す理想的な人間社会を実現することを目指した、透谷の理想主義的な「アンビション」は、現実の政治では成し遂げられず、文学や信仰へ傾けられていきます。

此年〔明治14年〕は国内政治思想の最も燃え盛りたる時なりければ、生も亦風潮に激発せられて、政治家たらんと目的を定むるに至り、奮つて自由の犠牲にもならないと思ひ起せり、従来のアンビションは悉く此一点に集合し、畏るべき勢力を以て生の心を支配し始めたり。

北村透谷「石坂ミナ宛書簡一八八七年八月十八日」勝本清一郎編『透谷全集』第3巻、岩波書店、1955 (昭和30) 年

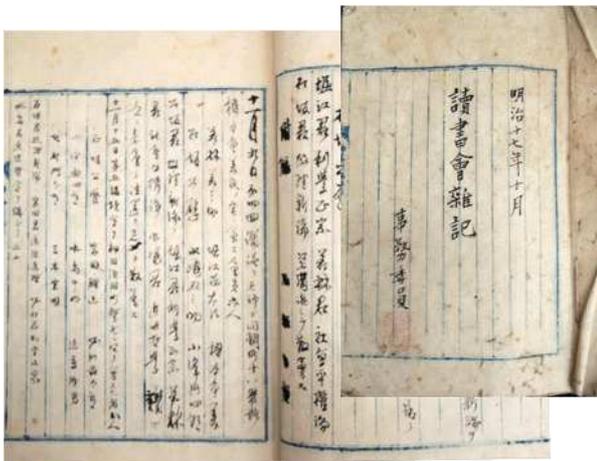


9. 「若き日の北村透谷」1883 (明治16) 年、小田原市立図書館蔵

透谷14歳の肖像写真。

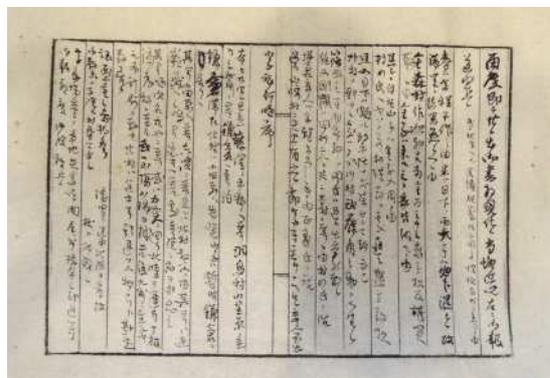


13. 「美那子と公歴と友人たち」1882 (明治15) 年頃、堀越氏蔵 (町田市立自由民権資料館寄託) 中央が美那子、右端が公歴。



11. 「明治十七年読書会雑記」1884 (明治17) 年10月、若林氏蔵 (町田市立自由民権資料館寄託)

民権派青年を中心に結成された学習グループ。透谷と自由民権運動との関わりを具体的に明らかにした最初の資料。透谷は第5回11月15日の読書会に参加している。



14. 石阪公歴「石坂昌孝宛書簡」1885 (明治18) 年6月24日、西城氏蔵 (町田市立自由民権資料館寄託)

公歴が透谷と同行した相州旅行中に父昌孝に宛てた書簡。

15 参考

秋山国三郎

若き民権家に慕われた。



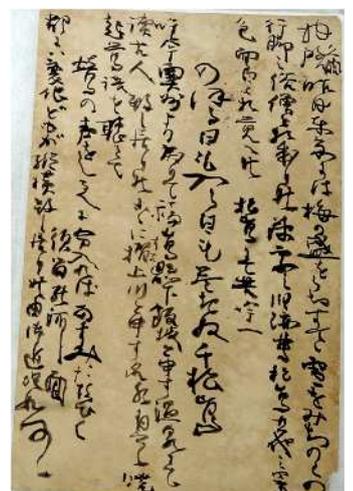
15. 北村透谷「三日幻境」『女学雑誌』甲の巻325号、1892 (明治25) 年8月、小田原市立図書館蔵 (複製版)

透谷が「希望の故郷」と呼んだ川口村の秋山国三郎邸を4度目に訪問した時の紀行文。



三鷹の民権家吉野泰三への葉書

年賀状は明治24年から明治25年までのもので、透谷と吉野泰三の付き合いが透谷文学の絶頂期まで続いていたことが分かる。透谷は、暴力的示威行動が議会を制するきっかけになった「神奈川県会騒動」によって石坂昌孝をリーダーとする自由党系政治運動に批判を加えることになる。吉野泰三は石坂昌孝と勢力を二分するほどの民権家であったが、同様の理由によって自由党から離れていた。平成4年、鶴巻孝雄が透谷自筆書簡5通を、三鷹市野崎の自由民権家吉野泰三の関係文書の中から発見した。



19. 北村門太郎「奥州行脚中の吉野泰三宛葉書」1892 (明治25) 年4月13日、吉野氏蔵

第3章 透谷と文学

政治活動を離れた透谷は、本格的に文学に取り組み、1889 (明治22) 年には日本初の自由律長詩『楚囚之詩』、1891 (明治24) 年には劇詩『蓬萊曲』を出版します。また、創作と同時に評論活動を展開し、『女学雑誌』主宰者巖本善治を通じ、浪漫主義文学の機運を先導した雑誌『文学界』に寄稿し、文壇デビューを果たします。『女学雑誌』に掲載された男女の恋愛を謳った『厭世詩家と女性』(明治25年)は、当時非常な衝撃をもって迎えられ、若き島崎藤村もこれに大きな感銘を受けたといわれます。透谷の文学的な活動が最高潮に達したといわれる1892 (明治25) 年、透谷は評論や小説を60編ほど執筆しています。文学者として地歩を固めたこの時期には、石阪美那子との大恋愛を経た結婚、さらには受洗という内面的な転換がありました。



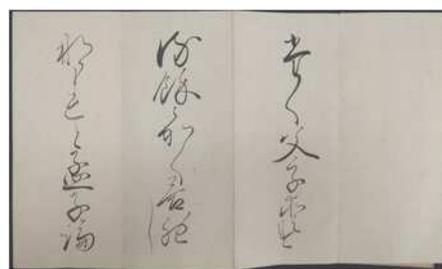
22. 北村透谷『楚囚之詩』春祥堂、1889 (明治22) 年4月、小田原市立図書館蔵

透谷最初の作品。大阪事件で逮捕された友人をモチーフにしているといわれ、日本初のロマン主義の長詩とされる。



32. 「英子をはさんで美那子と登志・家族」、西城氏蔵 (町田市立自由民権資料館寄託)

左から2人目が美那子で、間にいるのが英子、右から2人目が妹の登志。美那子はミッション系女学校で学んだインテリ女性だった。



26. 石阪美那子「決意書」1884 (明治17) 年、西城氏蔵 (町田市立自由民権資料館寄託)

美那子が封印した自筆文書。女性としてあるべき生き方が書かれている。

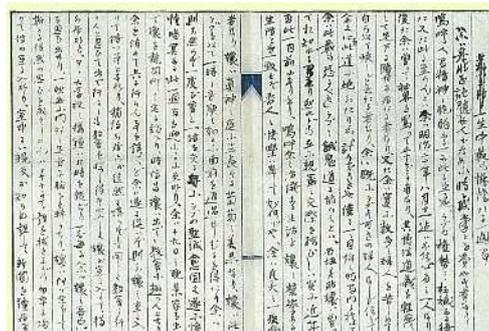


25. 北村透谷「厭世詩家と女性」『女学雑誌』303・305号、1892 (明治25) 年2月6・20日

力強く恋愛を讃美したこの文章は、当時の若い世代に大きな衝撃をもって迎えられた。

彼の結婚は家庭の許さざるどころであつた。それにも拘らず彼は猛進してそれを決行した様である。余は人の家庭隠秘のこと評すを潔とせざるものゝ此れが為には彼れは人生を味うといふことに於て少なからず経験を得たらしい。こゝに於てか彼の文学が生じたのではあるまいか。要するに恋は彼が文学的才能の蓋を明け又それを大に発達せしめたるものと思はるゝ。恋は門太郎を迫害しそれと同時に透谷を喚起し又これを成さしめたのではないか。

(紅蓮洞「『春』の青木と余が知れる透谷」『読売新聞』1908 (明治41) 年12月13日)



27. 北村透谷「一生中最も惨憺たる一週間」1887 (明治20) 年8月、(『近代文学手稿100選』二玄社、1994 (平成6) 年11月)

この手記は、美那子と別れを決意するまでの一週間の様子が綴られている。



37. 星野天知「文学界に就て」原稿、神奈川近代文学館蔵

『文学界』を主宰した星野天知は透谷と交流が深かった。『文学界』同人のこと、透谷との交流、死後の全集の編纂などを回顧している。



参考「『文学界』の人々」同誌は浪漫主義文学の先駆となった。前列左より2番目が星野天知、後列右が平田禿木。透谷と親しく交流した。



35. 北村透谷「心の経験」『聖書之友雑誌』70号、1893 (明治26) 年10月、鈴木一正氏蔵

透谷は『聖書之友雑誌』の64号から70号 (明治26年4~10月) まで主筆となり、編集を担当している。



34. 「日本平和会の人々」堀越氏蔵 (日本近代文学館寄託)

英国人プレスウェイトらと撮影。後列左端が透谷。明治22年秋頃、透谷はフレンド派の伝道をしていたプレスウェイトの通訳として就職した。

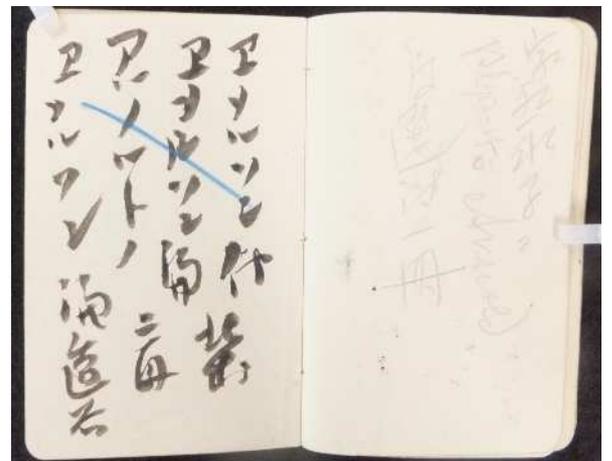
第4章 晩年 国府津長泉寺～東京芝公園

1893(明治26)年、透谷は国府津長泉寺に転居し、約4か月の生活を送りますが、翌年東京に戻り、芝公園の自宅で自死します。国府津への転居は、体調の不調とも、徳富蘇峰の『エマルソン』執筆依頼に応じるためだったともいわれます。この時期の健康状態の悪化は深刻で、透谷は「われつらつら近時の自己を顧みるに、危機にのぞめること久しと謂ふべし。凡そ一時間も本を読めば、即ち大に勞れて為すところを知らず、思想も亦た斯の如し、此地に來りてより「評論」の爲に一文を為さんには、凡そ四五日を費やせり、斯の如きはこれまで曾てあらざりしところ、之を以て余は余が精神の当を失いつゝあるを知るものなり」(勝本清一郎編『透谷全集』第3巻、岩波書店、1955(昭和30)年)と記しています。健康状態が持ち直すことはなく、日記が記された翌年には死にいたります。

この時期に制作された詩や評論は、研ぎ澄まされた、透谷文学の完成を予感させる作品が多いとされ、再び故郷で過ごした日々は透谷の心につかの間の安寧をもたらしたと考えられます。



45参考「長泉寺」
透谷晩年の一時期を過ごした国府津の寺。

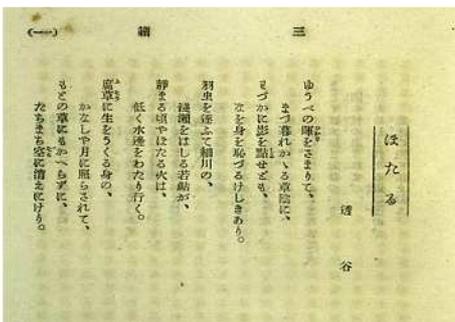


49.徳富蘇峰「手帖」1893(明治26)年頃、徳富蘇峰記念館蔵

『エマルソン』執筆に際し、透谷が蘇峰に借用した英文書籍。蘇峰は透谷に好感を持っていたとされる。

国府津の寺は、北村君の先祖の骨を葬つてある、さういふ所縁のある寺で、彼処では又北村君の外の時代で見られない、静かな、半ば楽しい、半ば傷いてゐる時が来たやうであつた。「国府津時代は楽しくござんした」とよく細君が、北村君の亡くなつた後で、私達に話した事があつた。『蝶の歌』が出来たのもあの海岸だし、それから『一夕観』などを書いたのも彼処だつた。(中略)国府津時代に書いたものは皆味の深いものばかりだが、然し余り長いものはもう書けなかつた。

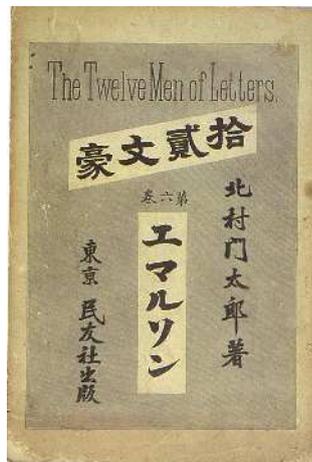
(島崎藤村「北村透谷の短き一生」『文章世界』7巻10号、1912(大正元)年10月)



51.北村透谷「ほたる」『三籟』4号、1893(明治26)年6月、鈴木一正氏蔵

君曰く、大涛怒り激浪踊るにあらずや。人間何ぞ独り静なるを得むと、また語をつぎて、誰か我一生の悲しき事を伝ふるものぞといふ。この時蘇峰氏の囑によりて、エマーソンが伝を編むまむとす。蝶の歌をつくる前後三篇、悲凄々人の心を襲ふ。これ終焉の作となる、悲しからずや。

(平田栞木「蝉羽子を吊ふ」『文学界』第17号、1894(明治27)年5月)



48.北村透谷『エマルソン』民友社、1894(明治27)年、小田原市立図書館蔵

民友社社主徳富蘇峰より「拾文豪」シリーズの1巻として依頼された。



47参考『国民之友』

蘇峰が主催した民友社が発行した総合雑誌。透谷は1893(明治26)年1月の新年号に際し蘇峰から小説の執筆依頼を受け、小説「宿魂鏡」を執筆した。

第5章 透谷の現在

透谷の死の直後、『文学界』には、同人による追悼文が寄せられ、翌6月には、『文学界』同人を中心に、坪内逍遙や山路愛山なども出席した追悼会が行われました。また、星野天知や島崎藤村は死の直後から全集の編纂に着手し、『透谷集』、『透谷全集』、『改編透谷全集』を刊行し、透谷の顕彰と作品の普及に大きく貢献しました。

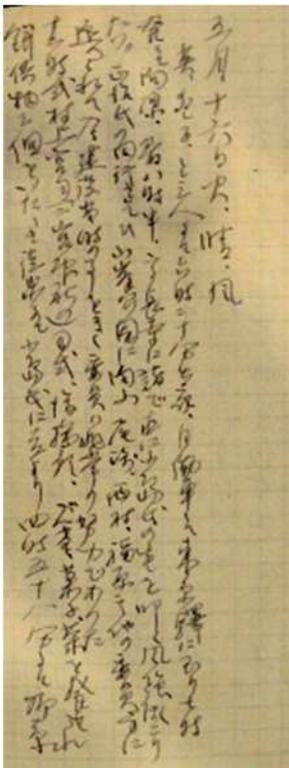
生誕の地小田原における顕彰活動は、『函東会報告誌』（明治27年7月、37号）における追悼文の掲載、没後24年を記念して福田正夫らの詩誌『民衆』が「北村透谷号」（大正7年5月）を組んだことなどがあげられます。彼らは、初の透谷碑となる「透谷に献す」碑の建立の発起人となりました。碑の建立は紆余曲折を経、昭和3年に島崎藤村が「答申書」を提出し、昭和4年に竣工し、昭和8年に除幕式が開催されました。この時小田原を訪れた美那子は建立の話聞き、「委員は非常の努力であつた」と日記に記しました。

北村透谷は、近代文学の先駆者として名を残し、その作品は没後120年を経過した現在でも愛されています。



69.「北村透谷に献す碑前の美那子」西城氏蔵（自由民権資料館寄託）

透谷碑は、福田正夫等、小田原の有志を中心として建てられたもので、透谷碑としては最初のものとなる。写真は、昭和8年の除幕式で撮影された。



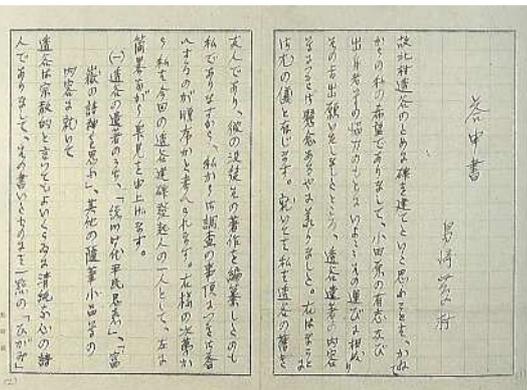
70.北村美那子「日記帳」1933（昭和8）年、西城氏蔵（自由民権資料館寄託）

美那子の晩年の日記。昭和8年5月16日の項には、小田原の透谷碑除幕式に出席した様子が記されている。



73.富本憲吉「北村透谷肖像レリーフ」堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

「透谷文学賞」は昭和12年9月に中河与一が発起人となり創設された。レリーフデザインは陶芸家富本憲吉、揮毫は島崎藤村による。



67.島崎藤村「答申書」1928（昭和3）年9月、小田原市立図書館蔵

透谷碑建立に際して島崎藤村が県に提出した。亡き友を思う心情に溢れた内容。

66.山路愛山「北村透谷を懐ふ」原稿、1907（明治40）年、西城氏蔵（自由民権資料館寄託）

「人生相渉論争」を交わした愛山は、私生活では親しく交流があった。資料では、透谷が飼っていたヤギの散歩に青山墓地まで同行したことが記される。



64.島崎藤村「『改編透谷全集』序文」1921（大正10）年9月、原稿、神奈川近代文学館蔵 大正11年3月『改編透谷全集』（春陽堂）の序文の原稿。

63.「島崎藤村肖像」1893（明治26）年、堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

裏には藤村の字で、「透谷庵へ寄す」「わか影や己れにあたへん飛ぶこてふ」とあり、表には透谷の字で「島崎藤村氏」と墨書きがある。



北村透谷略年譜

年	年齢	できごと
明治元年(1868)	0歳	小田原唐人町に北村快蔵の長男として生まれ、門太郎と名づけられる。
明治2年(1869)	1歳	父快蔵単身上京し、昌平黌に入学。
明治4年(1871)	3歳	ジフテリアに罹るが治癒。父快蔵、足柄県官員となる。
明治6年(1873)	5歳	5月、弟垣穂誕生。秋、父母は垣穂と上京、透谷は祖父と継祖母のもとに残される。
明治7年(1874)	6歳	小田原で小学下等八級に入学したとみられる。
明治11年(1878)	10歳	春、祖父玄快が倒れ、快蔵は大蔵省を辞して妻子を伴い小田原に帰り、看護にあたる。
明治12年(1879)	11歳	5月19日、弟垣穂、元小田原藩士族丸山良伯の絶家を継ぐ。
明治14年(1881)	13歳	春、父母は透谷と垣穂を伴い上京し、兄弟は数寄屋橋の泰明小学校に転校。島崎藤村も泰明小学校に転入学。自由民権運動が最も高揚、少年透谷も政治家になろうと志す。
明治15年(1882)	14歳	1月23日、泰明小学校を卒業。4月、敬愛する校長の転任、母の抑圧などが重なり気鬱病を発して寝込むほどになり、父は透谷を地方旅行に出す。透谷の旅行好きはここにはじまる。このころ、赤ら顔と本名「門太郎」からモンキーとあだ名された。
明治16年(1883)	15歳	3月から5月まで神奈川県議会臨時書記となり、神奈川自由民権運動に接触。その後英語学習のため横浜居留地のグランド・ホテルにボーイとして雇われる。春ごろまでに大矢正夫を知る。このころ大矢を通して川口村の秋山国三郎を知る。石阪昌孝の知遇を得、その長男で透谷と同年の公歴とも親交を結ぶ。
明治17年(1884)	16歳	5月、祖父玄快が小田原で死去。透谷は各地を巡り歩き、トラヴェラーとあだ名された。政治への「アンビション」が最高潮に達する。7月下旬富士登山(時期は異説あり)。
明治18年(1885)	17歳	大矢から資金調達のため強盗への参加を求められ、苦悩の末に政治運動と決別。6月、石阪公歴に伴われて石阪昌孝邸に行き、昌孝の紹介で公歴の姉美那子とはじめて会う。後年の彼女の回想では、透谷からは思索型の青年という印象を受けたという。
明治19年(1886)	18歳	民権運動から離れて個人の生活に戻るが、精神は荒廃。石阪公歴12月に渡米。
明治20年(1887)	19歳	本郷区龍岡町の昌孝の別邸に出入りし、再会した美那子との間に激しい恋愛感情が生じるが、彼女には婚約者がいた。8月美那子との恋愛を断念するが、9月激しい恋情の手紙を書く。このころキリスト教入信。「一生中最も惨憺たる一週間」執筆。
明治21年(1888)	20歳	3月、数寄屋橋教会において受洗入会。10月、父隠居し家督相続。11月3日、美那子と結婚、数寄屋橋教会で挙式。
明治22年(1889)	21歳	4月、『楚囚之詩』自費出版。11月、日本平和会を設立し平和運動に従事。
明治23年(1890)	22歳	11月、普連土女学校の英語教師に就職。
明治24年(1891)	23歳	5月、『蓬萊曲』自費出版。11月、「二宮尊徳翁」を『女学雑誌』に掲載。
明治25年(1892)	24歳	「厭世詩家と女性」の原稿を持って巖本善治を訪ね、2月『女学雑誌』に掲載、注目される。巖本より同誌の文芸評論欄への毎号執筆を依頼される。6月長女英子誕生。8月から9月、「三日幻境」を発表。9月、徳富蘇峰や星野天知を訪問。
明治26年(1893)	25歳	1月、藤村にかわり明治女学校に勤務。同月『文学界』創刊。2月「人生に相渉るとは何の謂ぞ」発表、山路愛山と「人生相渉論争」発生。8月、国府津在前川村長泉寺の一室に転居。『エマルソン』の執筆を始める。9月ごろより精神に異常を感じ、12月28日、自宅で咽喉を突き自殺をはかり、病院に運ばれる。
明治27年(1894)	25歳 4ヶ月	1月、病院から自宅に戻るが「我が事終れり」と筆を執ることはなかった。しかし見舞いに來た巖本らに文学への抱負を語るなど内面的気力はあったという。5月16日明け方、芝公園の自宅の庭で縊死。翌日キリスト教式の葬儀が自宅で行われた。

資料解説

第1章 北村家

1. 北村玄快「先祖書」1842(天保13)年、小田原市立図書館蔵 小田原有信会文庫

小田原藩が家臣の履歴や家系の調査のため、定期的に臣下に提出させた「先祖書」。資料は透谷の祖父玄快が天保13年に書き上げたもの。北村家は透谷の祖父まで養子で、祖父の祖父が前川村の在医から腫物治療の腕を見込まれて正式の家臣となったことが記される。

2. 北村快蔵「建白書」1870(明治3)年、「断鳳片鱗」1938(昭和13)年、小田原市立図書館蔵 小田原有信会文庫)

透谷の父快蔵(1842-1904)は、医師玄快の長男として生まれ、明治4年に家督を継ぐが、同年廃藩置県の詔勅が出された。快蔵は、医師の修行はせず、旧幕府系の大学「昌平黌」に進学する。しかし、旧幕府系の大学出では、明治国家でエリートコースを歩むことはかなわず、足柄県、大蔵省、水戸裁判所の下級官吏として転々としてすることとなる。旧藩主にあてた「建白書」は、維新によって生じた財政難を乗り越えるための藩政改革や人材教育が進言されており、快蔵が藩の存亡を案じていたことが分かる。透谷もまた「哀願書」により、民権運動の情勢が悪化した世情を嘆く気持ちを父に伝えている。

3. 川島正太郎編『現今名家書画鑑』真誠堂、1902(明治35)年12月

丸山古香(垣穂、1873-1928)は、日本画家久保田米僊が上京した明治24年以降に弟子入りしたと考えられ、弟子の明治30~40年代には画家として活躍した。「性恬憺にして気節あり。熱心以て絵事に励む」とされ、物静かだが信念のある人物とされた。

4. 1. 丸山古香「朧月図」『美術画報』7巻12号、画報社、1900(明治33)年9月

中国の神仙思想を題材とした作品。月を治める西王母が月桂樹を持ち、兎を連れている。兎は西王母の供で、月で月桂樹を材料に不老不死の薬を作った。古香は、「久保田米僊氏に就て研修し現今青年丹青家中屈指の一人なり/本図は明治三十一年日本絵画協会第四回共進会へ出品して好評を得らる」とされ、師米僊の画風をよく引き継いだとされ、優美な女性像を得意とした。美術雑誌『美術画報』は明治27年6月創刊、20年間継続し、画壇の概況をビジュアルに伝え、同時代のさまざまな画派の作品を取り上げた有力な雑誌だった。

4. 2. 丸山古香「八月図」『美術画報』11巻11号、画報社、1902(明治35)年9月

明治35年に秋の日月会絵画展覧会に出品した新作。12ヶ月を題材にした「月次絵」の一つとして制作された可能性がある。

4. 3. 丸山古香「女形普賢図」『美術画報』12巻8号、画報社、1903(明治36)年1月

『法華経』の「普賢菩薩勸発品」には、六牙の白象に乗って法華の修行者の許に現われ、守護すると説かれ、それに基く絵画がさかんに制作された。古香は、江戸時代の装束を身に着けた風俗画風の普賢菩薩を表現した。この作品は、「日月会派の俊逸、近似筆墨頓に上達せるの観あり」と評価され、日本画家梶田半古、工芸家海野勝珉と同じ誌面で紹介された。



4. 2. 丸山古香「八月図」

5.山縣閑水著・丸山古香画『新御伽話』内外出版協会、1901(明治34)11月、神奈川近代文学館蔵

西洋の物語に着想を得て、山縣閑水が日本風に創作した子ども向けの書籍。古香が挿絵を担当している。古香は、躍動感あふれる人物像や優美な美人を得意とした。日本画家が挿絵を描くことは多く、古香もまた、同書のほかにちりめん本”SOSHI-BUSHI”「壮士節」(十字屋、明治31年)や『透谷全集』(文武堂、明治35年)の挿絵を担当している。



5.山縣閑水著・丸山古香画『新御伽話』

6.「北村透谷生誕の地の碑」1954(昭和29)年

昭和29年に透谷碑の城内移転にともない、小田原市浜町に建立。揮毫は透谷の長女堀越英子による。

7.「生家」『民衆』5号、1918(大正7)年5月、小田原市立図書館蔵

〔参考〕石井富之助「生家」デッサン、小田原市立図書館蔵

透谷の生家の写真と『民衆』同人達。『民衆』北村透谷号の口絵に掲載された。人物は「民衆」の同人。この写真を元に石井富之助が描いたデッサンがある。

8.丸山古香「透谷肖像画」(『透谷全集』文武堂、1902(明治35)年10月所収) 小田原市立図書館蔵

全集を編んだ星野天知の呼び掛けにより、実弟丸山古香が口絵の透谷の肖像画を描いた。

第2章 門太郎とアンピション 1868(明治元)年~1885(明治18)年

9.「若き日の北村透谷」1883(明治16)年、小田原市立図書館蔵

透谷14歳の肖像写真。透谷は、明治元年に北村家の長男として出生し、自由民権運動や平和活動などにに関わりながら文学を志した。写真の明治16年は、神奈川県議会の臨時書記となり、三多摩地域自由党トップの石阪昌孝・公歴親子と出会い、透谷が本格的に自由民権運動へ参加する契機の年だった。島崎藤村は「北村透谷の短き一生」のなかで、「北村君の容貌の中で一番忘れられないのは、そのさもパツシヨンに燃えてゐるやうな、そして又考へ深い眼であつた」と回想している。



10 北村透谷「哀願書」

10.北村透谷「哀願書」1884(明治17)年、早稲田大学図書館蔵

父快蔵に宛てた書簡草稿。現存する透谷最初の文章であり、自由民権運動との関係を物語る資料。「世運傾頽」は民権運動の情勢が悪化した世情を示し、そこに自身の挫折感を滲ませているとされる。明治17年頃に執筆したといわれている。

11.「明治十七年読書会雑記」1884(明治17)年10月、若林氏蔵(町田市立自由民権資料館寄託)

自由民権運動は学習運動の側面があり、学習グループが全国に数多く存在した。明治17年10月に発会した「読書会」は民権派青年を中心に結成された学習グループで、武相の民権家の第二世代にあたる若林美之助(若林有信三男)や石阪公歴(石阪昌孝長男)を中心に活動した。透谷と自由民権運動との関わりを具体的に明らかにした最初の資料。毎月一回土曜日に

自由民権運動

国会や憲法をつくることで、国民の参政権を保障するよう政府に要求し、その実現をめざした運動で、明治10年代を中心に盛り上がりを見せた。その背景には、「人には生まれながらにして自由・平等の権利がある」とする天賦人権思想の影響がある。自由民権運動が描く国家構想や個人の自主性を重んじる考え方に透谷は共鳴したのかもしれない。

開催され、図書を講読し、それに基づいて討論するという活動だった。内容は、政治、法律、経済、思想や宗教など幅広い分野にわたるものだった。透谷は第5回11月15日の読書会に参加しているが、発表はしていない。この日は、石阪公歴「政理新論」、岩田雅正「道德原理」、堀江荘太郎「利学正宗」、水島牛之助「近世哲学」が講じられた。

12. 「石阪公歴とその同志たち」1885（明治18）年1月30日撮影、西城氏蔵（町田市立自由民権資料館寄託）

美那子の弟公歴と友人達の写真。透谷と同じ年に生まれた公歴（明治元年 昭和19年）は若き民権家のリーダーで、透谷とは、「読書会」を通じて交流をもった。明治19年に「家計回復のための商業実地研究」のため渡米した。西海岸オークランドでは、アメリカに亡命した青年民権家達と政論機関紙「新日本」を刊行したり、「愛国有志同盟」を結成するなど政治的な活動を展開した。その後は開拓に従事したが、日米開戦後収容所内の病院で亡くなった。

13. 「美那子と公歴と友人たち」1882（明治15）年頃、堀越氏蔵（町田市立自由民権資料館寄託）

石阪美那子と弟公歴、姉弟の友人達。透谷と美那子が出会ったのは、美那子の記憶によれば、明治18年の夏休みだという。青い実をつけた柿の木に登っていた思索型の青年が、美那子が見た最初の透谷だった。二人が再会し、激しい恋愛に陥るのは、2年後のことだった。

14. 石阪公歴「石阪昌孝宛書簡」1885（明治18）年6月24日、西城氏蔵（町田市立自由民権資料館寄託）

透谷とともに相州に旅をしていた公歴が父昌孝に宛てた書簡。透谷とともに名古屋・北陸・山陰・山陽を経て九州までの旅行を計画していたこと、「北村八途中ヨリ引退ク人物ナリト勘定致居候」などが記されており、当時の透谷の政治運動との関わりを具体的に示す資料となっている。

15. 北村透谷「三日幻境」『女学雑誌』甲の巻325号、1892（明治25）年8月

透谷が「希望の故郷」と呼んだ川口村の秋山国三郎宅を4度目に訪問した時の紀行文。このなかに、大阪事件の資金を集めるために非常手段（強盗）を決意した親友大矢正夫から参加を要請され、剃髪し杖をつく世捨て人の恰好で断りにいった3度目の川口村行が回想されている。この事件は未然に発覚し、大矢は強盗罪で処罰された。このことは、透谷が政治活動から離別し、文学へと向かう契機となった。

16. 北村透谷「富士山遊びの記憶」1885（明治18）年、堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

明治17年7月下旬に透谷は一人富士山に登った。途中で川口村の秋山国三郎宅に2泊し、大矢正夫と会ったことが「三日幻境」に記されている。明治18年夏に書かれた草稿だと奥書にある。現存する透谷最初期の創作であり、劇詩『蓬萊曲』との関連性が指摘されてきた。資料は、昭和29年5月15日「透谷碑移転除幕式並遺稿伝達式」において堀越英子が小田原市に寄託したもの。

17. 北村門太郎「吉野泰三宛年賀状」1891（明治24）年元旦、吉野氏蔵

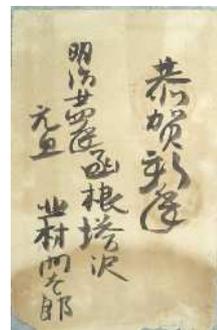
三鷹の民権家吉野泰三宛に箱根塔ノ沢から発信されたもの。透谷は明治23年12月29日から翌年1月3日まで祖父が療養生活を送った箱根塔ノ沢一之湯で年越しをした。



12. 「石阪公歴とその同志たち」

大阪事件

明治18年春にスタートした自由党系急進派が起こした最大規模の専制政府打倒計画。朝鮮の開化派を支援してクーデターを決行し、朝鮮政府を改革して朝鮮の宗主国である中国との緊張を作りだし、その機に乗じて日本国内の政権奪取も行う、という壮大な冒険主義的計画だった。指導者が大阪で逮捕されたことから「大阪事件」と呼ばれている。大矢正夫は、この事件の資金調達のために強盗に加わった。多くの関係者は、国事犯として裁かれた。



17. 北村門太郎「吉野泰三宛年賀状」1891（明治24）年

18. 北村門太郎「吉野泰三宛年賀状」1892（明治25）年1月1日、吉野氏蔵

吉野泰三宛に発信された年賀状。埼玉県の大宮郵便局の消印。「中仙道大宮 温泉水清く 俗塵遠き所」と記載されている。

19. 北村門太郎「奥州行脚中の吉野泰三宛葉書」1892（明治25）年4月13日、吉野氏蔵

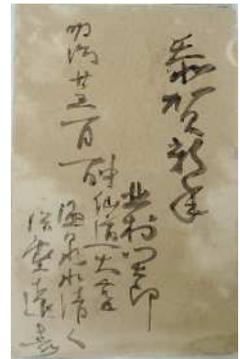
福島県飯坂温泉から投函されたもの。キリスト教伝道旅行の途中で脳病を再発して療養していた透谷が、俳句と和歌を交えて近況報告したもので、二人の交流の深さが示されている。

20. 宮崎湖処子「透谷庵を憶ふ」『国民新聞』1894（明治27）年6月5日

宮崎湖処子（1864-1922）は、透谷と同時期に東京専門学校（現早稲田大学）に在学している。東京専門学校卒業後は民友社に入社し、『国民之友』『国民新聞』に拠って、詩・小説・評論を発表した。小説『帰省』やワーズワースの評伝『ラルヅラルス』、『湖処子詩集』などで知られている。この追悼・回想文には、東京専門学校時代の透谷に関して、唯一の貴重な証言が含まれている。

21. 北村美那子「『春』と透谷」『早稲田文学』32号、1908（明治41）年7月

島崎藤村『春』には、透谷と藤村がモデルとされる人物がそれぞれ登場する。この文章は、『春』の新聞連載にあわせて妻の美那子が透谷の思い出を語ったもの。美那子は「透谷と云ふ人は、外は虫も殺さぬやうな優しくて居て、内がいつも烈しく燃えて居た人です」と回想している。



18. 北村門太郎「吉野泰三宛年賀状」1892（明治25）年

第3章 透谷と文学 1886（明治19）年～1892（明治25）年

22. 北村透谷『楚囚之詩』春祥堂、1889（明治22）年4月、小田原市立図書館蔵

透谷が初めて世に出した作品だが、大胆すぎるという理由ですぐに発行中止した。自費出版で、日本初の自由律長編叙事詩とされる。タイトルにある「楚囚」とは、もともとは楚（古代の中国にあった国名）の囚人という意味で、転じて敵国にとらわれの身となった人のことをいい、『太平記』『実隆公記』にもこの語の引用がある。この作品の舞台もまた楚ではないが、獄中から故郷を思う政治犯の思いがうたわれている。

23. 北村透谷『蓬萊曲』養真堂、1891（明治24）年4月（日本近代文学館、1981（昭和56）年、小田原市立図書館蔵）

『楚囚之詩』に続く作で劇詩。弟の丸山垣穂が発行人となっているが、出版元の「養真堂」は透谷と同じ住所のため自費出版と考えられる。タイトルの「蓬萊」には、不老不死の仙人が住む里、富士山などという意味がある。序文で16歳のときの富士登山の経験が述べられていることと、透谷には「富士山遊びの記憶」や「富嶽の詩神を思ふ」など富士山をモチーフとした作品が多いことから、この作品の舞台を富士山とする説が有力だが、異説もある。

24. 名田房代プロデュース「蓬萊曲」公演ポスター、1964（昭和39）年、神奈川近代文学館蔵

〔参考〕名田房代プロデュース「蓬萊曲」公演パンフレット、1964（昭和39）年、鈴木一正氏

処女作「楚囚之詩」

「楚囚之詩」と題して多年の思望の端緒を試みたり、大に江湖に問はんと印刷に附して春祥堂より出版することとし、去る九日に印刷成りたるが、又熟考するに余りに大胆に過ぎたるを慚愧〔後悔の意〕したれば、急ぎ書肆に走りて中止することを頼み、直ちに印刷せしものを切りほぐしたり。

（北村透谷「日記」明治22年4月12日付、「透谷子漫録摘集」勝本清一郎編『透谷全集』第3巻、岩波書店、1955年9月）



劇詩『蓬萊曲』は、長い間舞台上で上演されることはなかったが、透谷没後 70 年の昭和 39 年に名田房代が『蓬萊曲』の初演し、俳優座劇場で舞台化が実現した。主役は狂言師の茂山千之丞が務めた。以後、『蓬萊曲』は、昭和 54 年、昭和 60 年、平成 6 年にも上演された。

25. 北村透谷「厭世詩家と女性」『女学雑誌』303・305号、1892（明治25）年2月6・20日、佐藤善也氏蔵

「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛拙き去りたらむには人生何の色味があらむ」と力強く恋愛を讃美したこの文章は、恋愛結婚が珍しかった当時であって若い世代に大きな衝撃をもって迎えられた。その中には島崎藤村、木下尚江など、のちの文学界をリードする人物も含まれていた。一方、結婚についてはその意義は認めつつも、その悲劇性が強調されている。

26. 石阪美那子「決意書」1884（明治17）年、西城氏蔵（町田市立自由民権資料館寄託）

美那子が封印した自筆文書。女性として求められた道になかった父母や婚家への孝心のあり方について論じたもので、儒教的な修身論・孝心論の影響がみられる。内容から「決意書」と呼ばれ、透谷と出会う前の執筆とされる。当時美那子には医師・民権家の婚約者がいた。

27. 北村透谷「一生中最も惨憺たる一週間」1887（明治20）年8月、堀越氏蔵（日本近代文学館寄託）（『近代文学手稿100選』二玄社、1994（平成6）年11月）

8月18日に美那子へ書簡を書いた透谷は、同日美那子を再訪し午前3時まで話したが、再び午前10時から午後4時まで話し込んだ。透谷は身を引くつもりだったが、美那子の慕情を感じ、決断できなかった。しかし21日になり離別の決意をした。この手記は、美那子と別れを決意するまでの一週間の様子が綴られている。

28. 北村透谷「石阪ミナ宛書簡」1887（明治20）年9月3日、堀越氏蔵（日本近代文学館寄託）

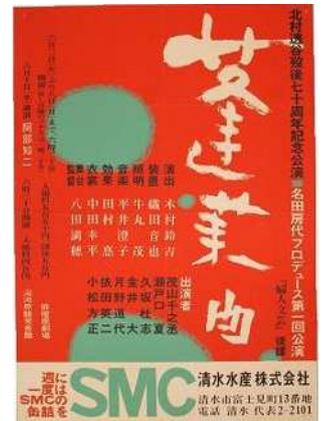
「一生中最も惨憺たる一週間」の後に書かれた、透谷から美那子に宛てた手紙。透谷は「小生は貴嬢と、最も親密なる交際を結ばん事かねてより、のぞみ居りける所にてありし、然しながら Mutual love〔両想い〕に陥らんとは夢にだも想はざりし」と、美那子への恋愛感情を告白している。

29. 北村透谷「石阪ミナ宛書簡草稿」1887（明治20）年12月14日、堀越氏蔵（日本近代文学館寄託）

この書簡で透谷は「情と欲」について述べている。これらは「自然」なものであり、「自然」は「神のたまもの」であると肯定的にとらえている。しかし、この書簡には投函された形跡がなく、美那子の手には渡らなかったようである。

30. 北村透谷「嗟世に愛情より」1888（明治21）年頃、堀越氏蔵（日本近代文学館寄託）

宛名がないが、美那子へ向けて書かれたものとみられ、2枚目以降は失われている。「嗟世に愛情より優なる者あらんや、嗟世に愛情より美なる者あらんや」という書き出しで、愛情は優美であると繰り返しつつも、人が抱く愛情の裏にある打算的な心情を指摘している。



24「蓬萊曲」公演ポスター

普連土教会と平和運動

日本最初の平和主義運動に参加した透谷は、平和主義を標榜する普連土派との交流があった。明治22年秋頃、透谷はフレンド派の伝道をしていたジョージ・ブレスウエイの通訳として就職したのが、普連土教会・日本平和会との関わりの契機とされる。透谷は翌年には普連土女学校の英語教師となった。透谷はブレスウエイを「立派な善人」として心服していたという。日本平和会は明治22年に設立されたが、日露戦争の勃発とともに解散した。

（勝本清一郎「北村透谷の生涯」『伝記』1巻6、8号、1947（昭和22）年9、11月）

31. 厨川白村『近代の恋愛観』改造社、1922（大正11）年、小田原市立図書館蔵

厨川白村（1880 - 1923）は京都帝国大学教授も務めた文芸評論家。「ラブ・イズ・ベスト」という書き出しで始まるこの評論は、恋愛は自由な個人である男女の人格的な結合であると主張して「愛なき夫婦関係」を否定、恋愛結婚を肯定して大きな反響を呼んだ。この評論より30年前に「厭世詩家と女性」で表明された透谷の恋愛観と通じるところがあるが、透谷は恋愛において肉体より精神の優位を主張しているのに対し、白村は霊肉一致の結婚生活を理想とする点が異なっている。

32. 「英子をはさんで美那子と登志・家族」、西城氏蔵（町田市立自由民権資料館寄託）

左から2人目が美那子で、間にいるのが英子、右から2人目が妹の登志。登志は明治5年に石阪昌孝の次女として生まれ、明治21年9月に東京音楽学校に入学し、バイオリニストを目指した。卒業後は明治女学校、横浜市老松小学校の音楽教員だった。

33. 「^{ふれんど}普連士教会の人々」堀越氏蔵（日本近代文学館寄託）

フレンド派（クエーカー）宣教師コーサンドと米国フレンド外国伝道協会から派遣されたモリス夫妻、ヘーンズ嬢、板垣糸子親子とともに水戸で撮影された写真。後列左端が透谷。

34. 「日本平和会の人々」堀越氏蔵（日本近代文学館寄託）

ブレスウエイト、加藤万治、板垣糸子親子、森たけ子らと撮影。後列左端が透谷。

35. 北村透谷「心の経験」『聖書之友雑誌』70号、1893（明治26）年10月、鈴木一正氏蔵

透谷は『聖書之友雑誌』の64号から70号（明治26年4月～10月）まで主筆となり、編集を担当している。『聖書之友雑誌』掲載の評論・社説・記事・翻訳36編は、『透谷全集』（岩波書店）に初めて収録、紹介されたものである。その中で唯一、北村門太郎と署名のあるのが、この「心の経験」である。「人間の生涯は心の経験なり。心とは靈魂の謂にして、人間の生命の裡の命なり。」で始まるこの評論は、透谷の「心」に対する強い関心が示されるとともに、心の経験を積むことの重要性が語られているが、それは思想、信仰の問題であると同時に、自らの測りがたい心的経験の問題でもあったともいわれる。

36. 『文学界』1号、1893（明治26）年1月、堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

『文学界』は、星野天知、平田禿木らを中心に、女学雑誌社が発行した月刊の文芸誌。透谷は第1号に「富嶽の詩神を思ふ」を載せ、以後評論を中心に掲載していく。のちには樋口一葉の小説、島崎藤村の詩なども掲載された。

37. 星野天知「文学界に就て」原稿、神奈川近代文学館蔵

『文学界』を主宰した星野天知は透谷と交流が深かった。『文学界』同人のこと、透谷との交流、死後の全集の編纂などを回顧している。

38. 平田禿木「星野天知宛書簡」（1893年3月10日付）、1893（明治26）年、神奈川近代文学館蔵

39. 平田禿木「星野天知宛書簡」（1893年3月21日付）、1893（明治26）年、神奈川近代文学館蔵

40. 平田禿木「星野天知宛書簡」（1893年3月31日付）、1893（明治26）年、神奈川近代

人生相渉論争

山路愛山と透谷の間に起こった有名な論争は、1893（明治26）年1月13日『国民之友』第178号附録に載った愛山の「頼襄を論ず」がきっかけであった。この文章の冒頭は、次のとおりである。

「文章即ち事業なり、文士筆を揮ふ猶英雄剣を揮ふが如し。共に空を撃つ為めにあらず為す所あるが為也。万の弾丸、千の劍芒、若し世を益せずんば空の空なるのみ。〔中略〕文章は事業なるが故に崇むべし。吾人が頼襄を論ずる即ち渠の事業を論ずる也」

この数行に示された愛山の功利主義的文学観をきびしく批判したのが「人生に相渉るとは何の謂ぞ」である。文章ばかりが飾り立てられ、若い男女の恋愛だけを描くような文学が流行していることを批判し、文章は事業であり、人生とかわらなければ空の空だとする愛山に対し、透谷は世益主義・功利主義で純文学を攻撃するのは文学の自立のためには危険だと主張した。

論争についての山路愛山の回想

透谷と余の論戦は頗る激烈なりき。然れども余は個人たる透谷に対しては常に毫も愛敬の念を失はざりき。（「透谷全集を読む」『信濃毎日新聞』明治35年10月13日）

文学館蔵

41. 平田禿木「星野天知宛書簡」(1893年7月3日付)、1893(明治26)年、神奈川県近代文学館蔵

平田禿木は、明治6年生まれの日本文学者・随筆家。東京高等師範(現筑波大)英語専修科卒。明治36-39年に英国オックスフォード大学に学んだ。帰国後、東京高等師範、学習院、三高教授などを歴任。明治20年、キリスト教受洗。明治23年6月、星野天知を主筆に雑誌『女学生』が創刊され、天知に文才を認められていた禿木は『女学生』の編集を手伝わされた。やがて透谷や島崎藤村なども寄稿して文学的情熱が高揚していき、明治26年1月の『文学界』創刊にいたった。透谷の死後は、「鋭犀な感情家 北村透谷」を『中央文学』(大正8年7月)に発表している。38-41に関しては会期中一部展示替えがあります。

42. 平田禿木『文学界前後』四方木書房、1943(昭和18)年、小田原市立図書館蔵

『文学界』同人の平田禿木による回想録。『文学界』同人についての回想と透谷の晩年の様子を知ることができる。

43. 北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」『文学界』2号、1893(明治26)年2月、佐藤善也氏蔵

山路愛山が『国民之友』に掲載した、江戸期の歴史家・思想家頼山陽^{らいのぼる}について論じた「頼襄を論ず」に対する反論として書かれた評論。タイトルは、「頼襄を論ず」中の「華麗の辞、美妙の文、幾百巻を遺して天地間に止るも、人生に相渉らずんば是亦空の空なるのみ」からつけられた。透谷は、愛山の立場を「事業」(事実)を標準として文学を評価するものと受け止め、文学の純粹性を守る立場からこれを批判した。この論争は「人生相渉論争」といわれ近代文学史上有名であるが、透谷と愛山はプライベートでは親密であった。

44. 北村透谷「明治文学管見之四 政治上の変遷」『評論』4号、1893(明治26)年5月、鈴木一正氏蔵

雑誌『評論』に連載された評論で、元の題は「日本文学史骨」である。透谷はこの雑誌の文学評論欄の責任者となったため、大きな日本文学史の構想をもって第1回「快楽と実用」、第2回「精神の自由」、第3回「変遷の時代」と書き進めたが、第4回「政治上の変遷」で中断した。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を読んだ藤村の感想

透谷兄の一文、愛山氏も顔色蒼く相成候事と覚え候。頼朝と西行とを比して、孰れかよくいひ、孰れかよく言はざるといひ、吉野山の林檎すでにをかしく、靈劍の一行まことにうれしく、芭蕉の一句をぬいて透谷庵の風流を吐くところ、桃青も大喜びと存候。「吾牢獄」といひ、「心機妙変」といひ、「富嶽の詩神」といひ、その間を貫いて貴庵の風流は見え申候。批評風雅の二位を一体にしたる風情、うらやましくも古い藤庵よりは透きとほるやうに見え候。一篇の「文学界」、冥想すれば草庵文学と見え申候も、をかしく御坐候。

(島崎藤村「書簡」1893(明治26)年、滋賀県蒲生郡市ノ辺村より星野天知・北村透谷・星野男三郎・平田禿木宛)

第4章 晩年 国府津長泉寺～東京芝公園 1893(明治26)年～1894(明治27)年

45. 石阪美那子「国府津時代と公園生活」『新天地』1巻1号、1908(明治41)年10月

【参考】長泉寺

明治26年8月から12月まで透谷一家は、透谷の健康状態の悪化や経済的理由から国府津の長泉寺に仮寓した。国府津での生活は、書齋で執筆をするか、釣りや海水浴をするといった穏やかな日々だった。妻美那子によると、透谷は「暴れ狂ふ大海を好」んだというが、この回想は、明治40年代の「春」新聞連載による透谷再評価の機運のなかで、「文士遺族及び未亡人の懐旧談」特集の一つとして尾崎紅葉や樋口一葉とともに掲載された。

46. 北村透谷「二宮尊徳翁」『女学雑誌』293号、1891(明治24)年11月、佐藤善也氏蔵

「尊徳翁は余が郷里の人なり。曾つて之を一父老に聞く」という書き出しで始まり、透谷が尊徳の功業を聞いて育ったことが示されている。

47. 北村透谷「宿魂鏡」『国民之友』178号、1893（明治26）年1月、鈴木一正氏蔵

主人公山名芳三を巡る三角関係の恋愛を描く小説。女の魂を写す「古鏡」によって主人公が社会的立場とともに精神的安定を失い、死に至る様を幻想的に描く。徳富蘇峰より依頼を受けて執筆した。鏡のモチーフは中国清代の長編小説『紅樓夢』の影響が指摘されている。

48. 北村透谷『エマルソン』民友社、1894（明治27）年、小田原市立図書館蔵

民友社社主徳富蘇峰より「拾式文豪」シリーズの1巻として依頼された。蘇峰はアメリカの思想家ウォルド・エマソンを敬愛しており、透谷自身も蘇峰から好意を持たれていたようである。透谷は、深刻な健康状態を抱えつつ、明治26年8月30日から「エマルソン研究」に着手し、12月末に脱稿した。伝記、作品紹介、論考が所収されている。日本初となるエマソン評伝となった『エマルソン』は、明治27年4月に刊行された。エマソンは、内村鑑三、徳富蘇峰、国木田独歩等の明治の知識人に影響を与えたといわれている。明治25年の「厭世詩家と女性」では、エマソンの思想の影響が指摘されている。

49. 徳富蘇峰「手帖」1893（明治26）年頃、徳富蘇峰記念館蔵

『エマルソン』執筆に際し、透谷が蘇峰に借用したと思われる英文書籍が記されている。書名は、「エメルソン伝」、「エメルソン論」、「アルノルトノエメルソン論」(Matthew Arnold "Discourses in America"(1885))。

50. 北村透谷「漫言一則」『函東会報告誌』23号、1892（明治25）年4月、小田原市立図書館蔵

日本人と西洋人の自然感覚の相違を述べた評論。函東会は小田原藩士族の子弟で高等教育を受けたものを中心する会で、透谷は明治24年に入会し、この雑誌の補助編輯員を務めた。透谷は、明治24年8月には同会の足柄部大会において戯曲の音読を行った。

51. 北村透谷「ほたる」『三籟』4号、1893（明治26）年6月、鈴木一正氏蔵

52. 北村透谷「蛩」『文学界』58号、1898（明治31）年1月、鈴木一正氏蔵

「蛩」は透谷の死後、見つかった作品で、明治31年1月『文学界』58号（終刊号）に掲載された。明治26年6月30日以前の作とされ、「ほたる」の草稿と思われる。限られた時間のなかではかなく生きる存在の蛩は透谷自身の心情を重ね合わせているのだろうか。

53. 北村透谷「蝶のゆくへ」『三籟』7号、1893（明治26）年9月、鈴木一正氏蔵

54. 北村透谷「双蝶のわかれ」『国民之友』204号、1893（明治26）年10月、鈴木一正氏蔵

透谷の詩の重要なモチーフの一つとして蝶は頻出する。『文学界』同人の戸川残花は透谷を蝶に例えた。現在では、蝶を魂ととらえる東洋思想の影響を指摘し、透谷自身の象徴ととらえる見方がある。「蝶のゆくへ」では、宙に舞う蝶は、透谷自身の「迷い」を表現し、透谷自身の死生観が強く表れているとされる。「双蝶のわかれ」は、一つの枝にとまる二羽の蝶が夕べの鐘の音に驚いて飛び立ち、別れを告げるといったものである。

55. 北村透谷「露のいのち」『文学界』11号、1893（明治26）年11月、堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

晩年の詩作について

明治26年6月以降の透谷晩年の詩作は、「ほたる」に始まり「露のいのち」に終わる。この時期の詩作は、抒情性の強い瞑想的な抒情詩から叙景詩への趣を呈するようになるといわれ、「ほたる」「蝶」「露」が中心的モチーフとなるが、これらは、死を前にした透谷が、はかないもののイメージに魅かれていったことを示すとされる。（橋詰静子『透谷詩考』国文社、1986昭和61）年10月）

透谷の最後の詩作となった作品。透谷の「露」には多様な意味が与えられ、生命の果てる姿や、草のような力弱い存在の上ののしかかる重荷を象徴するとされる。この作品は、透谷自身のいのちを露のいのちに見立てたと考えることができる。

56. 北村透谷「劇詩の前途如何」『文学界』12号、1893（明治26）年12月、堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

劇詩『蓬萊曲』を出版し、戯曲の執筆構想を持っていた透谷の演劇論。歌舞伎を越えた新しい演劇の創出への期待と前途の多難さが述べられている。

57. 北村透谷「漫罵」『文学界』10号、1893（明治26）年10月、佐藤善也氏蔵

国風・洋風が入り混じる銀座の光景から得た所感を、「今の時代は物質的の革命によりて、その精神を失はれつゝあるなり」に続き、日本の明治維新を、「革命にあらず、移動なり」と述べた文明批評。具体的な情景描写も興味深く、戦前の中学校の教科書に掲載された。

58. 「高長寺の墓碑」

透谷をはじめ、芝白金台町瑞聖寺に埋葬され、昭和29年5月に透谷碑の城内移転に伴い、妻美那子とともに小田原高長寺に改葬された。

59. 「文箱」堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

透谷が生前愛用していた文箱。蓋は「乱寄木」という数種の模様の木片を組み合わせた古い箱根細工の技法で制作されている。

60. 「硯」堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

透谷が生前愛用していた硯。

第5章 透谷の現在

61. 『文学界』22号、1894（明治27）年10月、小田原市立図書館蔵

〔参考〕星野慎之輔編『透谷集』文学界雑誌社、1894（明治27）年10月

透谷の死の直後、星野天知、島崎藤村ら『文学界』の同人によって刊行された。最初の著作集。36編を収めている。

62. 星野天知等編『透谷全集』文武堂、1902（明治35）年10月、堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

同書は、『文学界』同人の星野天知、戸川秋骨の序文、平田禿木、島崎藤村の追悼文が再録されている。「日記」や「手紙」などを収載した個人全集は、同全集が嚆矢といわれている。

63. 「島崎藤村肖像」1893（明治26）年、堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

「文学界」同人の島崎藤村は生前透谷と親交が深く、透谷没後の顕彰活動に寄与した。この写真は神戸中村写真館で撮影したものといわれる。鶏卵紙に印画された手札版の写真で、裏には藤村の字で、「透谷庵へ寄す」「王か影や己れにあたへん飛ぶこてふ」とあり、表には透谷の字で「島崎藤村氏」と墨書きがある。

64. 島崎藤村「『改編透谷全集』序文」1921（大正10）年9月、原稿、神奈川近代文学館蔵

〔参考〕島崎藤村編『改編透谷全集』春陽堂、1922（大正11）年3月、鈴木一正氏蔵

大正11年3月『改編透谷全集』（春陽堂）の序文の原稿。『改編透谷全集』は、『透谷集』に

未収録の日記や書簡などを拾遺したもので、原稿では、「かねて私は透谷の著書が絶版にひとしひ有様にあるのを憎み、折を見て再編を公けにしたいところざしては居たが、今日までそれを果し得なかつた」が、老境に入った美那の手紙を読み、一念発起したと、再び全集を編むことになった経緯を詳細に記している。

65. 島崎藤村『春』(1908(明治41)年10月、自費出版)

『朝日新聞』東京版朝刊に明治41年4月7日から8月19日まで135回連載された。島崎藤村の最初の新聞小説である。わずか5年間の活動だった『文学界』同人の青春群像を自伝的に描き、『文学界』及び透谷の再評価をもたらした。登場人物の青木が透谷、岸本が藤村である。日露戦争後の煩悶の時代に、透谷は人生問題を考えようとした先駆者として改めて評価された。

66. 山路愛山「北村透谷を懐ふ」原稿、1907(明治40)年、西城氏蔵(町田市立自由民権資料館寄託)

『文章世界』2巻6号、1907(明治40)年5月に掲載されたもの。愛山は透谷を回顧し、「僕の議論八固より君と合はず仲間も自ら異なりたれども、君は議論は議論、友誼は友誼として明かに区別したる人なりしかば僕は始終君と交はることを得たりしなり」とした。

67. 島崎藤村「答申書」1928(昭和3)年9月、小田原市立図書館蔵

透谷碑は、尾崎亮司や福田正夫など、小田原の有志によって建てられたもので、透谷碑としては最初のもの。自死したことや作風が過激であることを理由に許可が下りなかったが、昭和3年に島崎藤村が「答申書」を提出してようやく許可が下りた。「透谷は宗教的と云つてもよいくらゐに清純な心の詩人でありました」という亡き友を思う心情に溢れた内容である。

68. 「北村透谷に献す」碑

小峯公園内大久保神社に碑が建立されたのは、昭和4年6月だった(除幕式は昭和8年5月)。その後昭和29年5月に城址公園の広場に移された。碑の中央には「北村透谷に献す」の字が刻まれ、その左に代表作が刻まれている。平成22年12月に小田原文学館に移された。揮毫は島崎藤村、碑のデザインは小田原出身の彫刻家牧雅雄である。

69. 「北村透谷に献す」碑前の美那子」西城氏蔵(町田市立自由民権資料館寄託)

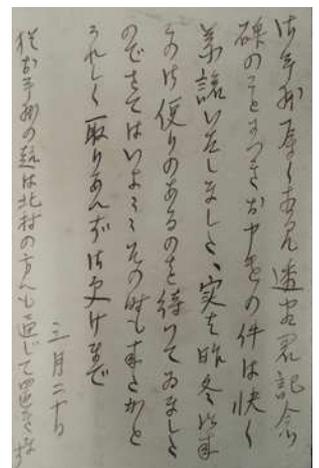
小田原の透谷碑除幕式に出席した昭和8年5月16日の写真。

70. 北村美那子「日記帳」1933(昭和8)年、西城氏蔵(町田市立自由民権資料館寄託)

美那子が晩年、娘の堀越英子の家に同居していたころの日記(昭和7~9年)。昭和8年5月16日の項には、娘の英子、孫の愛子とともに小田原の透谷碑除幕式に出席した様子が記されている。早朝東京駅を出発し、小田原駅到着後、高長寺に参拝したのち、小峯公園で式に参列した。福田正夫など委員に建設当時の苦労話を聞き、「委員は非常の努力であつた」と感慨深げに感想を記した。

71. 『透谷追慕展覧会目録 附現代文学者資料展』1947(昭和22)年5月17日、18日、小田原市立図書館蔵

透谷没後55年を記念して、小田原市立図書館・小田原国民文学研究会主催で開催。戦後の物資不足の時代にあつて「日本新詩壇の開祖北村透谷」の作品を展示することにより、市民の心に「幾分の滋味」を与え、青少年の「情想」に寄与するという目的で開催された。刊行



78. 島崎生「福田正夫宛葉書」

物、同時代資料 48 点が展示された。序文は書誌研究家齊藤昌三（1887-1961）、略伝は評論家神崎清（1904 - 1979）による。

72. 『土岐・運・来 『北村透谷没後 100 年』展』チラシ、1994（平成 6）年、小田原市立図書館蔵

透谷没後 100 年に際し、町田市立自由民権資料館や早稲田大学図書館など、透谷ゆかりの地では特別展が開催された。小田原市立図書館では、平成 6 年に小田原市立かもめ図書館の開館記念行事として、『北村透谷没後 100 年』展、講演「透谷と近代」（吉本隆明）の開催、図録の刊行を行った。堀越家から日本近代文学館と小田原市立図書館に分けて寄託されている資料 39 点を中心に展示し、透谷の業績を辿った。

【参考】「透谷祭の様子」第 1 回、1994（平成 6）年、透谷祭実行委員会

市民有志による小田原透谷祭は平成 6 年の透谷没後 100 年を契機とし、透谷と美那子の墓がある高長寺において毎年行われている。

73. 富本憲吉「北村透谷肖像レリーフ」堀越氏蔵（小田原市立図書館寄託）

「透谷文学賞」は昭和 12 年 9 月に「不遇にして然も時代に先駆せる作品にこれを与へる」という趣旨で中河与一が發起人となり創設された。受賞者には賞碑と賞金が授与された。主催者の透谷会の委員は、中河与一・島崎藤村・佐藤春夫・武者小路実篤・与謝野晶子・萩原朔太郎・吉江喬松・戸川秋骨の 8 人で、『日本浪漫派』の作家などを中心に構成された。レリーフは、民藝運動に共鳴した陶芸家富本憲吉がデザインし、「透谷記念」の文字は島崎藤村が揮毫した。第 1 回は中河与一、第 2 回は保田与重郎、第 3 回は岡崎義恵、第 4 回は萩原朔太郎、第 5 回は伊東静雄、堀口捨己、田中克己。昭和 16 年第 5 回をもって中止となった。

74.〔復刻〕北村透谷「秋窓雑記」『女学雑誌』甲の巻・330 号、1892（明治 25）年 10 月、佐藤善也氏蔵

「一夕観」、「秋窓雑記」など、抒情的な透谷の晩年の作品は、特に戦前に中学校の教科書に採録された。漢文訓読文体・和漢混淆文体で書かれた透谷の文体は、声に出してみると魅力が引き立つといわれるが、透谷の作品は暗唱して学ばれた。教授のポイントは各々異なり、「透谷にとって秋は彼の友であり彼の時であった。述べる所は秋の心といふよりはむしろ大方彼の心である。授者は特にこの作者の心境に注意するがよい」というものや、「彼の語らんとすることの中心は秋の興」とするものもあった。（『新定国文読本参考書』巻 5、目黒書店、1928 年 / 『昭代女子国文教授要領』巻 4、光風館書店、1939 年）

【参考】「北村透谷研究会」

日本近代文学の源流として透谷を位置づけ、その活動や業績を学問的に考察する研究会として、平成 3 年 9 月、佐藤泰正や平岡敏夫等 16 名の日本文学研究者によって発足した。活動内容は、全国規模の研究大会や機関誌の発行を毎年継続し、節目の年には論文集を刊行するなどして、透谷研究の中核を担い、透谷及びその作品の普及に大きく貢献している。

75. 向田邦子原作・中村務脚本『あ・うん』東宝、1989（平成元）年 5 月、鈴木一正氏蔵 向田邦子原作の男女のプラトニック・ラブ(精神的恋愛)を描いた小説『あ・うん』の映画台本。日本で最初に「プラトニック・ラブ」を提唱した人物として透谷の名前が登場する。



76. 映画『北村透谷・わが冬の歌』チラシ

76. 島崎春樹「美那子宛書簡」1938（昭和13）年、小田原市立図書館蔵

『改編透谷全集』を編んだ島崎藤村は、透谷没後も美那子と交流があった。手紙では病気の回復を報告している。

77. 映画『北村透谷・わが冬の歌』チラシ、1977（昭和52）年12月、橋詰静子氏蔵

ATG映画『北村透谷・わが冬の歌』の監督は日活出身の山口清一郎、主演みなみらんぼう、プロデューサー富山加津江、チーフ助監督崔洋一。透谷の既成のイメージを打破するため、政治でも文学でもなく、恋愛を主題に据え、新たな透谷像を描くことを試みた、日活出身の監督による官能的な作品。透谷の肩にザクロの刺青があったという小説『春』の挿話を採用したり、謎の女性・蝶を設定するなど独創性の高い作品となった。

78. 島崎生「福田正夫宛葉書」1928（昭和3）年3月20日、小田原市立図書館蔵

透谷碑は建学の許可がなかなか下りなかったため、発起人のひとり福田正夫が、透谷と親交があり文壇での地位も確立していた島崎藤村へ答申書の執筆依頼をしたと思われる。これはそれに対する承諾の葉書とみられる。

用語解説

富士登山

富士登山の風習は室町時代に一般化し、富士山をはじめ各地の名山で修行者たちによる集団登山が行われるようになった。江戸時代になると、富士登山はますます盛んになった。交通が発達し旅行が容易になってくると、民間信仰のひとつとして各地の神社・仏閣に参詣する団体的な組織がみられるようになった。これが講社と呼ばれるもので、伊勢参拝を目的とする伊勢講などがあつた。また、高山の靈氣にふれ、日常では経験できない宗教的靈驗にあやかろうとする登山講社が結成され、夏の登山期には村や町から続々と団体登山が行われるようになった。当時の新興宗教ともいえる富士講もそのひとつで、これによって富士登山はさらににぎわいをみせるようになる。透谷の「富士山遊びの記憶」にも「真行大人が尽力して此北口を開きつゝ富士講社を團結し其後に至りて隆盛を極めたりし」とあるが、「靈魂の高き場所に止まれるといふ事を妄信せしに相違なし」と、富士講については揶揄するような書き方をしている。

明治時代になると宗教登山は次第に少なくなるが、旅の延長としての山登りは多くの人によって行われ、むしろその数は増えていった。なかでも、富士山、白山、立山の三山は、江戸時代から登山を趣味とする人々の間でひとつの目標とされていたようである。透谷も富士山を目指したひとり、透谷の「富士山遊びの記憶」は明治 16 年に単身富士登山した経験をもとに書かれたといわれる。タイトルに「遊び」とあるように、透谷もあくまで旅として富士山に登ったようである。

明治 30 年代には、山岳会が設立されるなど山に向かう人々はますます増加する。この時期の登山の隆盛の背景には透谷や島崎藤村など、雑誌『文学界』の同人たちによって発達した浪漫主義の影響があるといわれている。とくに透谷の「富嶽の詩神を思ふ」は、超越的な山としての富士山を題材に、東洋的な自然をうたいあげて当時の青年たちの間で愛唱されたというが、山をロマンティズムの対象とした浪漫主義文学は、山岳会会員をはじめ登山者たちに強い影響を与えた。

外来概念としての恋愛

明治時代になるまで、日本には「恋愛」がなかったという考え方がある。「恋愛」という語は明治に使われ始めた翻訳語で、それまでは男女の好意を表現するのに「色」「恋」「情」などの語が使われていた。では、これらの語と「恋愛」はどう異なるのか。

透谷は、近松門左衛門の浄瑠璃を論じた「『歌念仏』を讀みて」(『白表・女学雑誌』第 321 号、明治 25 年 6 月)の中で、奉公人清十郎に対するヒロインお夏の思いを次のように述べている。

其情は初はじめに肉情センシユアルに起りたるにせよ、後に至のちて立派いたりなる情愛アツフエクションにうつり、果はては極きはめて神聖なる恋愛ラブに迄進みぬ

「恋愛」は「ラブ」とルビがふられ、「極て神聖」とされる。つまり、透谷は男女関係において「肉情」よりも精神的な「恋愛」を上位とみなし、その中間に「立派」な「情愛」を位置づけていたことがわかる。「肉情」は、透谷を含む明治の知識人たちが批判の対象とした「色」であり、それに対して精神的な「恋愛」は「プラトニック・ラブ」として尊重されていたが、そこにはキリスト教的倫理観の影響もみとめられる。

『女学雑誌』と『文学界』

『女学雑誌』は明治18年に創刊された女性啓蒙誌で、第30号からは、この雑誌と明治女学校によって新時代に生きる女性の啓蒙を目指した巖本善治が主催者となった。この雑誌はキリスト教を基盤に女子教育論を展開し、日本の初期婦人解放運動に重要な役割を果たした。明治25年ごろからは、透谷は「厭世詩家と女性」「処女の純潔を論ず」などを発表して新しい時代の女性の理念を示すとともに文学批評などでも活躍し、この雑誌を代表する作家となった。また、島崎藤村はさまざまな翻訳によって後の活躍にむけて基礎をかためていた。このころの『女学雑誌』は文芸的性格を強め、啓蒙的女学の読者とは異なる青年男女の層を開拓していた。

一方、明治23年6月からは星野天知によって、女生徒の作品を集めた『女学生』が刊行された。これの発展的解消も含めて、社会改良論と文芸が中心で白い表紙の『女学雑誌』が誕生し、家庭向けで赤い表紙の『女学雑誌』と分かれたが、さらに文芸的傾向の強まりに応じ、明治26年1月『文学界』が創刊した。他方、『女学雑誌』(白表紙)は後に『評論』と改題され、透谷の「明治文学管見」などがこれに掲載された。

『文学界』同人

『文学界』は『女学雑誌』を母胎として誕生し、第2号までは『女学雑誌文学界』という名称だったが、第3号からは単に『文学界』として発行された。ここからは女学雑誌社ではなく、文学界社の発行誌として歩み始める。

『文学界』の同人には編集人の星野天知をはじめ、透谷、島崎藤村、平田禿木、戸川秋骨、馬場孤蝶、上田敏などが、客員には樋口一葉、田山花袋、柳田国男などがいた。

同人の特徴として、その多くがキリスト教の洗礼を受け、あるいは思想的洗礼を受けながら後に信仰を喪失しているということがある。透谷、藤村、天知、禿木、秋骨はいずれも洗礼を受け、藤村、秋骨、孤蝶はキリスト教主義の明治学院に学んでいるが、透谷と天知を除いて信仰を喪失している。また、同人の大部分は少年時代に啓蒙思想、特に自由民権思想の影響を受けたが、この欧米の文化や政治的自由へのあこがれが、『文学界』における浪漫主義の成立に大きな影響を与えたと考えられる。

謝辞

本展開催及び本冊子制作にあたり、次の個人・機関の方々より御協力を賜りました。御芳名を記し、心より御礼申し上げます(敬称略、50音順)。

新井 勝紘	堀越 宏一	広報協力
奥間 政作	吉野 泰順	FM 小田原株式会社
西城 英一郎	若林 宏宣	株式会社 ジェイコム小田原
佐藤 善也		株式会社 神静民報社
杉山 弘	北村透谷研究会	株式会社 日本経済新聞社
鈴木 一正	県立神奈川近代文学館	
高木 知己	国際日本文化研究センター	
丹尾 安典	透谷祭実行委員会	
寺島 正芳	徳富蘇峰記念塩崎財団	
中村 一紀	日本近代文学館	
橋詰 静子	町田市立自由民権資料館	
堀越 曄子	早稲田大学図書館	